# ジュニア向け『寺田寅彦集』の魅力

四宮義正

寺田寅彦の作品集はジュニア向けにもたくさん編まれている。寅彦単独編のこともあるし、中谷宇吉郎や湯川秀樹などの科学者との合集になっている本もある。その編集者や解説者は作品を良く読み込んでいて、魅力があって分かり易い説明や感想を書いている。

写真や挿絵があって親しみがわく、注が充実している、教科書や副読本のように読み方の設問や鑑賞の手引きがある、などの特徴があって大人が読んでもおおいに触発される。

児童生徒向けの本はどうしても保存が難しいようで､目にすることが少ないのであるが、特に初期のころの 3 冊から、感想文や解説の一部を紹介する。

1.『寺田寅彦・中谷宇吉郎集』〈中学生文学全集 19〉（昭和 37 年 2 月 10 日、新紀元社）

二人の合集であるが、宇吉郎の作品には「「団栗」のことなど」や「寺田寅彦の追想」等寅彦関係が多く、一体感の強い本である。

中学生徒の感想が引用されているが、よく書けている。先生方の熱心な指導の成果であろうが、なかなか大人でも書けないような気がする。昔（昭和 30 年頃）の中学生はよく本を読み、作文も書いたのだろうか。今の時代も優秀な生徒であれば、これくらいは書くのかもしれない。生徒の感想を引用する。

○『藪柑子集』の作品について。

生徒 A「寅彦の初期の作品である藪柑子集は、彼の日々の経験や思い出をじつに細かく写生している。私は、その身近な生活の周辺に漂う抒情の美しさや新鮮な雰囲気にとても興味をもった。なかでも団栗・竜舌蘭・花物語などは、さまざまな角度から作者のちょっとした生活経験に取材してまとめたものだが、そこに流れる豊かな詩情というか、もやもやとしたほのあたたかい美しさに、なんとなくひきつけられて忘れることができない。…これが寅彦随筆の親しみ深さだと思うし､それはまた､人がらの自然の現われだとも思う。」

生徒 B「これらの作品を読み終えて、なにかしらさびしい気持ちになった。だけど、たださびしいというのではなくて、雨上りの虹のような美しい幻想が私の胸をかすめる。花園が胸いっぱいにひろがる。美しいものとさびしいものの入り混じったなかに、なにかを考えさせるような作品…。この作品の中の〝私〟（作者）に対して、なんだか自分自身に似た親しみを感じた。」

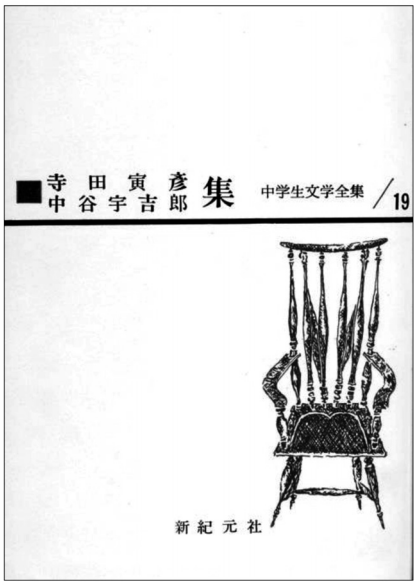
編者は「これらの写生文は、ただ今の文学作品のすべてにとり入れられている表現法であるとともに、みなさんが日常書いている作文においても忘れてはならない大切な技術であることをつけ加えておく。」としている。

○『冬彦集』など中期に吉村冬彦名で書かれた作品を中心にして。

生徒 C「作者はけっして、私たちの未知な世界を神秘的に描き出しているのではない。ごくありふれた身のまわりの自然や、日常茶飯事の生活をはぎれよく解剖して、私たちの盲点を反省させてくれる。この、何でもないことがらの奥の深い意味に、思わずはっとする。」

○『柿の種・橡の実』の作品について。

生徒 D「ぼくは今まで、寅彦のことを、実験室ばかり閉じこもっている、ぼくたちとはちがった種類の人のように思っていたけれど、これらの短い文を読んでみて、新しい人間味を発見することができた。勤めの帰りに花を買って来たり、まんじゅうや風船に心を引かれたり、ぼくたち以上にいろいろ豊かな感情を持っていることがわかって、なんだかとてもうれしいような気持ちがした。」



『寺田寅彦中谷宇吉郎集』扉

2.『寺田寅彦名作集』〈少年少女現代日本文学全集 25〉（昭和 40 年 3 月 25 日、偕成社）

めずらしい写真が巻頭アルバムになっている。また、司修の挿絵が素晴らしい。特に「竜舌蘭」「新星」「みの虫とくも」「とんぼ」「線香花火」「視角」（金網の目の中に風景が収まっている絵）、「災難雑考」（谷の吊橋の絵）など、文章をよく読んで、内容に即した分かり易い絵を添えている。

まず、山室静による「寺田寅彦の人と文学」（解説）が理解の助けになるので引用する。

○「地図をながめて」について。

山室「これも、私たちが見すごしている身辺の小さな物に、いかにも寺田さんらしい新しい光を投げかけた随筆ですが、ここでは自分の観察や労苦を語るのではなく、あらゆる不自由や、人跡未踏の山野を、重たい機具をかついで、危険をおかして、ただより正確な地図を作りたいだけに歩きまわっている無名の測量部員たちの労苦を、ひたすら語っている点に、作者の科学への愛情と、またニューマニズムが、美しくあらわれています。寺田さんの随筆では、いちばん美しいものの一つでしょう。」

滑川道夫、斎藤喜門による「作品の読み方、味わい方」では、中学生の読書感想文を紹介し、それを踏まえて解説している。二人の記述を引用する。

○「花物語」について。

「さらにこの「花物語」の特徴は、花そのものを中心とした思い出というよりは、ある時のある人のことを中心に語り、そして、いかにもその場にふさわしい一つの花をあざやかに目に浮かばせるところにある。つまり、人の中に花があり、花の中に人がいるということである。きっと寅彦は、人間にいつも心ひかれていたのであろう。」

「とにかく、九つのひとつひとつの話しが、それぞれに独特の雰囲気をもっていておもしろい。そこにある寅彦の見方、感じ方、その表現のたくみさを味わってみたいものである。」

○「旅日記から」「先生への通信」について。

「このように、鋭い観察眼、人の気づかぬところで、しかも、いかにもその土地、その民族のようすの表れているところをたくみにつかんで、ぴったりとそれを書き表わす、そこに五十年たった今日でも少しも変わらない新鮮さを見ることができる。」

○「茶碗の湯」「とんびとあぶらげ」について。

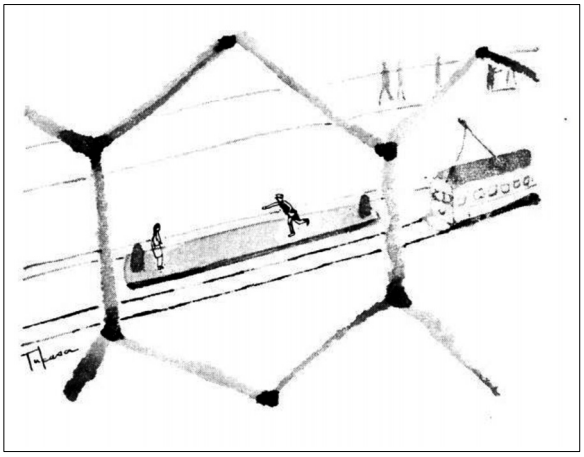
『寺田寅彦名作集』扉

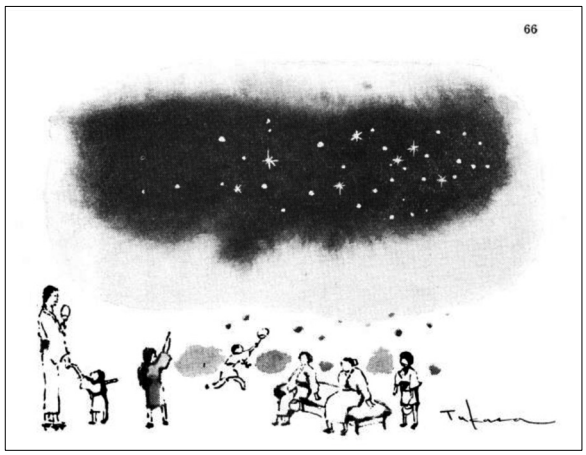
生徒の「茶碗の湯」の感想を踏まえて「この文章のすばらしさは、……第一にその考え方の発展のすばらしさにある。小さなことから、大きなことへ、浅いところから深いところへと、まるで糸をたぐるように思考を発展させていく見事さ、これは寅彦のひとり舞台をいってもいいすぎではなかろう。

第二に、その目のつけどころが、まことに身近で、だれも毎日目にしていることである。こんな身近な現象の中に、こんな大きなすばらしい科学の原理がふくまれていたと知ると、もう一度新しい気持ちで身のまわりを見なおさずにはいられない。寅彦は、わたしたちに、「遠くを見るよりは、まず身のまわりを見なさい。」と教えているのだろう。」

○「みの虫とくも」ほかについて。

「このように、問題を科学的に追究しながら、さらに人間として考えることも忘れなかったところに、寅彦の随筆のすばらしさがあるといえよう。」


「視角」挿絵



「新星」挿絵

3.『寺田寅彦選』〈中学生全集 72〉（昭和 27 年 2 月 29 日、筑摩書房）

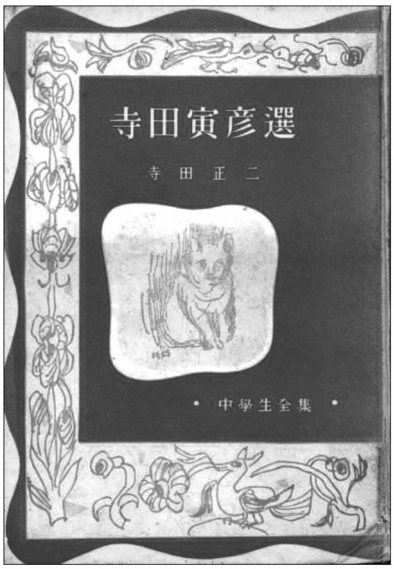
何と言っても寅彦の次男・正二の解説「読者のために」が素晴らしい。寅彦の身近にいて、ドイツ文学を専門にした人だけに本質を余すところなく説明している。ちょっと長いが、下に引用する。

この集に集められたはじめの小随筆篇はおもにこうした驚異を発見した時のおぼえ書きとして書かれたものでしょう。これらの小発見はあふれるように後から後からわいてきて、自分でみんな実際には追究しきれないので、思考実験として随筆の形に書きとめたのでしょう。したがってその中のあるものは実際研究のテーマとなって、科学論文となって学界に発表されているのです。またこうしていろいろな考えを書きとめておくことについて寅彦はこういっています。「私には書く事すなわち考える事である。頭の中で考えた事を紙へ書きならべて見るとつじつまのあわぬ点や、穴の明いた箇所がよく見えてくる。それをなおしているうちにまたつぎの考えが呼びだされてくる。」（略）

ことに晩年のものには、あふれでるアイディアをかたはしからはきだすように書かれたものが多く、表現に推敲を加えるようなひまはほとんどなくて比較的生硬な漢語なども多すぎて年少者には読みにくいと思うのです。（略）

なお編者の老婆心からもう一言つけくわえておきたいことがあります。それはこの本の中で「とんぼ」「藤の実」「とんびと油揚」「ほととぎすの啼声」のような種類のものについて、その中にのべられてある著者の考えを、そのまま「確定された事実」とお考えにならぬように、くれぐれも気をつけていただきたいのです。……ここではただ普通の人がめったに気にとめないような問題をとらえてきて、それを説明するいくつかの仮説を立ててみただけなのです。それは正しいかもしれないし、またあやまりなのかもしれないのです。（略）

またこれらの文章は、この私たちをめぐる世界にはまだ解決されていないおもしろい問題がどんなにたくさんかくされているかということを教えてくれます。ひとたびそうした眼をひらかれた人にとってはこの世界はけっして人をたいくつさせない、おもしろくてたまらないものになるのです。じっさいに寺田寅彦はそうした人の一人だったのです。



『寺田寅彦選』表紙

（注）作品名表記は取り上げた書籍に従った。